

タスク分析による英語科授業研究の試み

山口大学教育学部 深 沢 清 治

1 はじめに

教科教育の具体的事象は授業であり、多くの英語学習者にとって教室が最も重要な習得の場であるとすれば、授業は top-down アプローチによる「理論の実践化」のための応用の場としてだけでなく、bottom-up の方向による「実践の理論化」のための研究対象となりうる。これからの英語教育の進展は、教授・学習過程の科学的研究から得られるとする Bowers (1986: 407-408) の指摘を待つまでもなく、教室内の効率化を図るため、学習過程の記録・分析により授業研究を進め、授業改善へと導くことにこそ教科教育学の存在意義があると言えよう。

本研究は、教師言語や指導技術の分析を通して、教師の評価を主目的とした従来の「観察批評型」授業分析に対して、授業過程そのものを対象とする「研究型」授業分析をあるべき姿ととらえ、そのうち教師の与えるタスクに注目する。タスクの選択・配列が学習のプロセスに影響を与えるという仮説に立ち、タスク分析による授業研究の可能性を探り、そのひとつの試みとして、教育実習生の英語授業に見られるタスクの選択・配列の特徴を見出すことを目的とする。

2 新しい授業研究の視点

(1) 「観察批評型」から「研究型」授業分析へ

実践を対象とした授業研究は様々な形で行なわれており、その形態として次のような2つのタイプに分類されよう。一つは伝統的な形式で「観察批評型」とでも名づけられるもので、研究授業などの場において、参加者が経験をもとに、印象や感想を述べ合ったり、一人の指導助言者が教師の一举一動一言に注目し、評価者の持つ規範で教師を評価することが目的とされた。これに対して、「研究型」授業研究は、授業過程全体に注目し、出来るかぎり客観的に、量的な記述を重ね、それをもとに質的な分析へとつなぎ、最終的には教師の教授スキルを高めることを目的としている。これら2つの授業研究の形態は、以下のように対比することが出来よう。

「観察批評型」	「研究型」
teacher evaluation	teacher development
prescriptive	descriptive
technique-focused	process-focused
subjective/impressionistic	objective/systematic
qualitative	quantitative/qualitative

(2) 授業構想の視点 ―― インプットからタスクへ

英語授業を構想するにあたって、教師は2つの観点から準備を行なう。その一つは、教材の難易度を判定し、本時の教材から指導項目を抽出し、解釈し、パラフレイズ、例文探し、などを行なう教材(input)研究である。もうひとつは、インプットで与えた教材の理解を助けたり、理解確認をする発問作り、あるいは、目標言語材料を使って、様々な難易度の課題(task)作成である。授業構成にあたって、これまでは言語的観点からの狭義の教材研究には注意が払われても、一方、たとえば、理解の確認といった作業で与えるタスクの選択あるいは順序づけなどは教師の創造性や無意識な選択に任されてきた。

ここで言うタスクとは、言語を使った理解・表現を通して達成される活動全般を指し、いわゆる communicative task だけでなく、学習活動に相当する pedagogical task も含めて考える。学習者が接するインプットが、語彙、文法、トピック、テープ速度、などの変化により、難易度が変わると同様に、教師の与える個々のタスクが学習者に求める認知活動にレベルには差があると思われる。教授行為は常に授業過程の中でこれら2つの要因、インプットとタスクのバランスを取りながら、営まれるものである。このバランスが失敗すれば、授業中における混乱、沈黙、あるいは学習者の注意散漫などという結果につながると考えられ、学習のレベルに応じたタスク研究も教材研究と同様に重視されなければならない。

(3) タスクの難易度による階層性 ―― 発問の形式と内容について

英語の授業における発問という活動は、与えられた文章をどれだけ理解したかを確認するだけでなく、多様な読解上の視点を与えることにより、意味をつかませたり、更に深い理解へとつなげるという目的を持ったタスクの指示である。たとえば読解において、文章の題材・言語材料の持つ難易度に加え、異なった発問が個々の学習者に求める認知活動のレベルには差があると考えられる。教師によって与えられた発問が、学習者に求めるタスクの困難度を階層化するための視点を、発問の形式、求められる理解活動、の2点から分類してみる。

(a) 発問の形式による分類

まず、発問に対する応答のタイプに着目した五十嵐(1981)は、「Yes-Noタイプの質問型(Simple Q)は二者択一質問型(Alternative Q)よりも正しく理解し反応するのにより容易であり、二者択一の質問型は、これについて特殊質問型(Special-Q)よりも正しく理解し反応するのにより容易である」という仮説を立て、3つの質問型による聴解テストに対する解答の正答率から、質問の形式が次のような順で困難度が増加するという有意差および傾向を見出した。教師による発問の形式が求める認知活動のレベルには差があることが裏付けられたのである。

Simple Q (Yes/No) > Alternative Q (Either-or) > Special Q (Wh)

(b) 発問が求める活動による分類

発問の形式と同様に、それぞれの発問に対する応答に至る過程において求められる活動には、認知的要求に差があると思われる。たとえば、読解における発問についてNuttall(1982)は次の5つの分類を行なっている。

- Type 1 解答がそのままの形で本文中にある発問
- Type 2 本文のいくつもの部分をまとめたり再解釈を加える必要のある発問

- Type 3 行間を読み取ることによって解答が出せる発問
- Type 4 テクストの価値の判断を求める発問
- Type 5 個人的反応を求める発問

また、高梨・高橋(1987)は、「事実を読み取らせる発問」、「理由を考えさせる発問」、「内容を統合させる発問」など、7つの発問のタイプを実践例とともに提示し、さらに松浦(1990)も学習者の応答が単文、2文以上、文章全体レベルでの解釈を必要とするかによって、3つの簡便な発問の分類法を提案している。

このほかにも、学習者に求められる反応が、理解、表現、相互活動(interaction)、の順でより認知的負荷が高くなるとして、10段階の階層を提示したNunan(1989)などがある。個々の発問が与えるタスクは、言語材料の難易度など、多様な要因の相互作用によって重み付けに変化が付与される。授業分析においては、教師の出した発問を量と質の観点から分類し、授業改善へと結び付けていく必要がある。

3 タスクの難易度による授業分析の試み —— Reading comprehension において

英語授業において、理解タスクの指示は発問によって行われる。発問研究は、指導技術としての個々の発問の検討にとどまらず、1単位時間内に見られる発問の与えるタスクの選択・配列について、形式・内容の視点から検討していく必要がある。そこで、中学校での教育実習生の英語授業記録をもとに、発問分析により彼らの授業に見られるタスクの特徴を見ていく。

- (a) 目的：教育実習生が教師が教科書の本文の理解確認のための行なった発問を、タスクの観点から教師個人別、対象学年別に類型化し、タスク選択・配列の特徴を見出す。
- (b) 資料：教育実習生（A～I：教育学部英語専攻3年次生9名）の授業ビデオテープ・資料（1987～1988録画）を使用した。テキストは Total English 1～3であった。また、熟練教師の授業との比較のため、市販の模範授業ビデオテープも使用した。
- (c) 方法：教科書本文の読解過程での〔教師の発問+学習者の応答〕を一まとまりと捕らえ、個々の発問をその形式と要求される活動内容から、Nuttall(1982)をもとにして、次のようなマトリックスに分類する。

	Yes/No Q	Alt Q	Wh-Q	How/Why Q
Literal comprehension				
Reorganization/reinterpretation				
Inference				
Evaluation				
Personal response				

(d) 結果と考察：個々の実習生の発問は、次表のように集計された。ただし、発問の求める活動が本文の単文レベルでの解釈がほとんどであったので、形式による分類に限定した。

教育実習生の発問の形式別分布

実習生	担当学年	Yes/No Q	Alt Q	Wh-Q	Why/How Q	
A	1			6 J		
B	1	3 E				
C	1			9 J	1 J	
D	1	1 J		3 J		
E	2			3 J		
F	2			4 J		
G	2			3 J	3 J	
H	2	4 E	1 J		3 J	J (Japanese)
I	3	6 E		2 J		E (English)
		14	1 J	30 J	7 J	

集計されたデータが少なく、また、担当学年によって教材中の言語材料も異なることから、断定はできないが、これらのデータに見られる教育実習生の発問ストラテジーはつぎのようにまとめることができよう。

- 教育実習生の発問は、「何」を問うwh-疑問文が多い。
- 英語による発問は Yes/No 疑問文で、また、wh-疑問文は日本語のことがほとんどである。
- 本文中から該当する1文だけを読めば解答が見いだせる発問が多い。
- 談話レベルでにおける、より広い解釈を求める質問や、個人的反応、批判的読み、を引き出そうとする発問はほとんどない。
- 教育実習生一人あたりが持つ発問の種類は固定的で、学習者が答えに窮しても、タスク難易度のより低い発問に切り替えるよりは、同じ発問を繰り返すことが多い。

このような特徴から、本文の理解確認をやや一元的にとらえ、タスクの難易度まで考える余裕のない姿が想像される。授業分析の量的分析の結果として、英語の使用率が低いことが指摘されるが、日本語でしか応答できない発問を与えていることに起因するものと思われる。こうして、発問の形式上の難易度を、使用言語モード（英語か日本語か）の区別によりバランスを保っていることが分かる。

ここで、熟練教師の発問ボタンに見られるタスク選択・配列の特徴と比較してみたい。市販の模範英語授業ビデオでは、中学2年生のクラスでの復習、理解の指導過程に見られる発問は次のような順序で発せられている。

【復習】 WH-Q ⇒ Y/N Q ⇒ WH-Q ⇒ Y/N Q ⇒ HOW-Q (in English)

【理解】 Y/N Q ⇒ Y/N Q ⇒ Y/N Q ⇒ Y/N Q ⇒ Alt Q ⇒ Y/N Q (in English)

復習段階では、理解の定着を見るためにより高い認知作業を必要とするWh疑問文を中心とし、生徒が答えられないと、Y/N 疑問文からWh疑問文へと順に変え、連続的な質問としている。そして、本時の理解確認段階では、学習者にとって形式的により簡単と思われるY/N 疑問文に限定しており、指導過程に合わせたタスク選択がうかがえる。外国語としての英語教師にとって、同一のテストから多様な発問を英語で作り出すことを困難に感じる人が多いが、質問を中心としたコミュニケーション活動を列挙した Morgan and Rinvoluceri (1988) などは発問を計画する上で参考になることが多い。

4 おわりに

授業研究においては、a priori に「いかに」「あるべき」かが中心になることが多いが、本研究では授業研究に記述的性格を与え、「授業において何が行なわれているのか」を発問に見られたタスクの観点から分析することを提案した。そして、教師からの発問により与えられたタスクが学習者に与える認知的要求(cognitive demand)には差があるという仮説のもとに、教育実習生の英語授業に見られるタスク選択・配列の特徴を見出すことができた。今回の分析は、理解のレベルに限定したものであるが、今後は、表現のレベルにおいてもタスクの階層を設定し、授業のプロセスをタスクの観点からさらに分析を続けていきたい。従来、教師の創造性による無意識的選択に任されてきたタスク選択という活動を、教材研究と同様に、教師の専門性として意識的活動に変換させることは、授業改善へとつながる一つのステップとなるであろう。

REFERENCES

- Allwright, D. (1983), "Classroom-Centered Research on Language Teaching and Learning: A Brief Historical Review," TESOL Q, 17, 2, 191-204.
- Bowers, R. (1986), "English in the World: Aims and Achievements in English Language Teaching," TESOL Q, 20, 3, 393-410.
- Candlin, C. and D. Murphy (eds.) (1987), Language Learning Tasks. Prentice-Hall International.
- Morgan, J. and M. Rinvoluceri (1988), The Q Book. Longman.
- Nunan, D. (1989), Designing Tasks for the Communicative Classroom. Cambridge University Press.
- Nuttall, C. (1982), Teaching Reading Skills in a Foreign Language. Heinemann Educational Books.
- 五十嵐二郎 (1981) 『英語授業過程の改善』大修館書店。
- 佐野正之、米山朝二、多田伸二 (1988) 『基礎能力をつける英語指導法』大修館書店。
- 高梨庸雄・高橋正夫 (1987) 『英語リーディング指導の基礎』研究社出版。
- 松浦伸和 (1990) 「授業分析における発問の位置づけ」『中国地区英語教育学会研究紀要』 No.20, 13-17.